

DECEMBER 2005

危機に瀕するダルフルの子どもたち

For every child
Health, Education, Equality, Protection
ADVANCE HUMANITY

unicef 

ダルフルの 子どもたち

はじめに

数十万人の命を奪い、200 万人が家を離れることを余儀なくされた約 3 年間にわたる紛争後、いまだ続く争いや不安定な治安、干ばつ、不作、経済の崩壊などの要因が交錯して根強く存在しているために、ダルフルの子どもたちは今も重大な危機に直面しています。

避難キャンプやその周辺に生活する 150 万人以上の子どもは、ダルフルの歴史上最も完全ともいえる社会サービスが受けられるようになった一方で、不安定な日常の現実、経済麻痺がダルフルの子どもたち—キャンプ内や周辺の子どもたちも、キャンプ外に暮らす約 125 万人の子どもたちも—の生活を支配しています。近い将来に状況が即座に好転することはほとんど望めず、このような現実は、全世代にとって暗澹たる未来が待ち受けていることを示しています。



崩壊した村に残されたこなごなになつた水と食料用のつぼ

いま、この地域の日常は、衝突と無法状態だらけといえます。これは、作物や家畜を育てるために移動することが不可欠なこの地域にとって、経済活動の実質上の停止を意味します。農民と牧夫の間にあった資源の共有に関する繊細な慣習的取り決めも、既に紛争前から人口増加の圧力や資源不足によって崩壊しつつあったものの、完全に機能しなくなっていました。このため、部族や職業の違いに関係なく、ダルフルの全ての人の生活が脅かされているのです。

子どもたちはダルフルで起こった出来事の1つ1つに大きな傷を負っています。食料の略奪や水の欠如、住居の破壊、殺人に至る凶悪事件などのダルフルの悲劇によって、人口の大部分を占める子どもたちこそが危機に瀕しているのです。「民族浄化」や「避難」などの言葉の裏側には、不毛地帯へ避難を余儀なくされた人々や、人道支援が届かずに生存に苦しむ 300 万人以上の子どもたちの崩壊した生活があります。外交的な言葉で「財産の剥奪」と表現されるものは、要は子どものお皿から食べ物が奪われた状態のことを指すのです。

人道支援の一つの成果として、2005 年末までにキャンプ内または周辺に住む 175 万人以上の子どもたちが、ダルフル史上最も完全な社会サービスを受けられるようになりました。皮肉なことに、紛争の中で、現在最も良い状況に置かれているのは、キャンプ内やその周辺に生活できている人々です。対照的に、遠隔の農村地域に生活する人々（その殆どは政府の統制が及ばず、人道支援が届かない状況にある人々）は、日常的に戦闘と食料不足にさらされています。しかし、安全な場所はどこにもありません。キャンプに生活する子どもたちは更なる攻撃から逃れることができても、誰かに頼らずには生きていけず、恐怖の中で生活しています。



2005 年 12 月時点で、政府と反政府勢力はナイジェリアのアブジャで、政治的な行き詰まりを打開するための最後の望みである 7 回目の和平交渉を行っています。現在の停滞状況が続けば、帰還・復興・生活のたてなおしへの望みが更に遠のくこと懸念されており、全ての当事者に圧力がかかっています。これは、未だ統一した声明を出していない3つの反政府勢力についても、政府についても当てはまることです。

12 歳の女の子(右)が、どのように友人二人と離れ離れになったか、そして薪探し中にレイプされたかを説明しています

この報告書は、2005 年 12 月時点での、ダルフルの子どもたちの状況と生活を新しい視点で見つめることを目指しています。そして、ダルフルの子どもたちのためにだけでなく、全スーダンの若者世代の安定と発展のために、アブジャの交渉で合意に達することの重要性を指摘したいと思います。その緊急性は決して強調されすぎることはありません。日増しにコミュニティの力が失われ、子どもたちが可能性を最大限に発揮する更に多くの機会が減少してしまうのです。ダルフルの子どもたちは生存以上のものを求めています。彼らには平和を得る資格があるのです。

報告書について

これは、今まで人々の注目を受けることの難しかった危機にある国の子どもたちに関する初めての報告書です。この報告書が目指すのは、そのような国の特定の時期に子どもたちが直面する重大な諸問題を伝えることです。

この報告書では、次のような質問をなげかけています。数百万人が避難民となり地域の生活を激変させてしまった紛争が始まってから2年以上が経った今日、子どもたちの生活を形成している力は一体何なのでしょう、そして、そのような現状に目を向けた時、子どもたちに、そしてダルフルに訪れ得る将来とはどのようなものなのでしょうか？

入手可能な全ての報告書と国際的な報道を調査し、現地の子どもや家族、人道支援関係者との長時間にわたる対話を含めた生の報告を参考にしました。調査結果は希望をもたらすものではありませんが、現実を写しています。

- ・ 不安定な治安が商業・農業・牧畜の発展を阻害したために、経済が急速に悪化し、人々の国際支援への依存を深めました。2006年には食料の確保がますます難しくなることが予測されています。
- ・ 人道支援が届かない避難キャンプ外に暮らす子どもたちの状態は日に日に悪化しています。
- ・ 避難キャンプと村への攻撃が続いています。薪を収集する際に日常的にレイプに遭う可能性があるなど、多数の治安面の危険性に一般市民は直面しています。
- ・ 人々は厳重な警備の中に暮らしており、完全に自立した生活を追求することができずにいます。家族や子どもたちも生きることに必死で、希望は殆ど見出せません。

この報告書に答えはありません。今の子どもたちの生活と、人々に明日の改善への期待が見出せないほどの困難な状況の一面を伝えようとするだけです。私たちの目指すものは、力を持っている人々を揺り動かし、彼らの選択や行動がいかに関与しているかを問うことです。

この詳細な報告書のために私たちが力をお借りした人々と、ダルフルの実施パートナーの不断の努力に感謝します。

背景

この報告書はダルフルの紛争の根本的原因や影響に焦点を当てるものではありません。そのような内容は国連や大学、NGO などに既に多数取り上げられています。しかしながら、ダルフルの子どもたちの現状を理解するのに有益な基礎的な歴史や背景的な問題は多くありません。この地域は北・南・西ダルフルの3つの州があり、面積は50万k㎡、人口は600万人です。主な都市は首都のハルツームから1000キロ以上離れており、その距離がダルフルを長い間スーダンの歴史と経済の周縁に追いやっていたのです。現在の紛争の中核は、この「社会的無視」の問題です。きわめて貧しいダルフルは、植民地時代より中央政府から放置され、限られたインフラと社会サービスしか持たなかったのです。

この紛争は、政府派のアラブ民族とアフリカ系の反政府勢力との戦いとして捉えられてきました。しかしながら、「アラブ」と「アフリカ」という二分法によるレッテルは、スーダン及び外部の人間双方による誤った理解だと考えられています。なぜならダルフルの民族はそれぞれ関係を持ち、皆がイスラム教徒であるからです。現実には、各部族グループを区分しているのは、複雑で流動的な民族性と生活様式です。何世代もの間、遊牧民と土着の農民は共生してきましたが、干ばつや砂漠化に伴う人口の増加が資源の減少を招き、最終的に争いと紛争へと至ったのです。

現在の危機のきっかけとなったのは、2003年3月の北ダルフルの首都、エルファシの空港で、反政府勢力が兵士とスーダンの軍用機に対して攻撃をしたことだと一般的に考えられています。人々の関心も高く国際的な支援を受けたスーダン南部の和平交渉に対し、ダルフルが見過ごされたいという要求を公にするために、「正義と公正運動(JEM)」から支援を受けた「スーダン解放運動(SLM)」が攻撃を開始したのです。驚いた政府側はこれに軍事行動で応えました。暴徒を排除しようとする試みが失敗に終わったとき、地元の遊牧民族が一部を構成する代理軍が、焦土作戦に出たのです。この焦土作戦は南部での戦争をほうふつとさせるものでした。

その結果として起こったのは、世界で最も深刻で今なお続く人道危機の発生でした。



モルニ避難キャンプの栄養補給センターで、
国境なき医師団の治療を受ける母親と子ども

現在の状況

初期の暴力の連鎖とその後の人道的支援により、ダルフルの人々を3つの流動的なグループに分けられました。

第1のグループは紛争で土地を追われ、今は避難キャンプに暮らす人々です。その数は約 200 万人にのぼります。180 万人以上がスーダン国内の 200 のキャンプに分散し、更に 20 万人がチャド国境を超えたところにある難民キャンプに暮らしています。家を失った人々のうち 100 万人以上が 18 歳未満の子どもたちで、そのうち 32 万人は 5 歳以下です。彼らは最も影響を受け、途方もない苦しみに耐え、その多くは全てを失ってしまった人々ですが、国際的な人道支援により基本的ニーズは満たされている状況です。

第2のグループは紛争による影響を受けた住民とそのコミュニティーで、その数は 150 万人に上ります。彼らは街や村に住み、避難民を受け入れ、日に日に少なくなる食料を新たにやってきた人々と分け合ったり、または本来の住居にとどまったものの治安の悪さと食料不足に苦しんでいる人々です。後者の人々については、紛争以前から地理的な位置が原因で、物流の難しさや治安の悪さのため、社会サービスの提供を困難にしていました。

第3のグループは、人道支援の外で生活している人々です。政府と反政府勢力が支配する両地域に 250 万人が暮らしています。このグループについては殆ど情報がないため非常に重要なポイントだといえます。緊急支援を必要としないコミュニティもあるかもしれませんが、殆どのコミュニティは経済の崩壊と地域の軍事化の影響で、生計手段が失われ、食料の不足が懸念されています。政府と反政府勢力の両者からの妨害が減少するにつれ、人道支援機関も以前は手の届かなかった人々にも支援を届けるよう努力しています。目立った争いは減少しているにも関わらず、被災民の数が増加し、10 月だけでも 9 万人にのぼっているのは、このことが理由の一つです。

不安定な治安

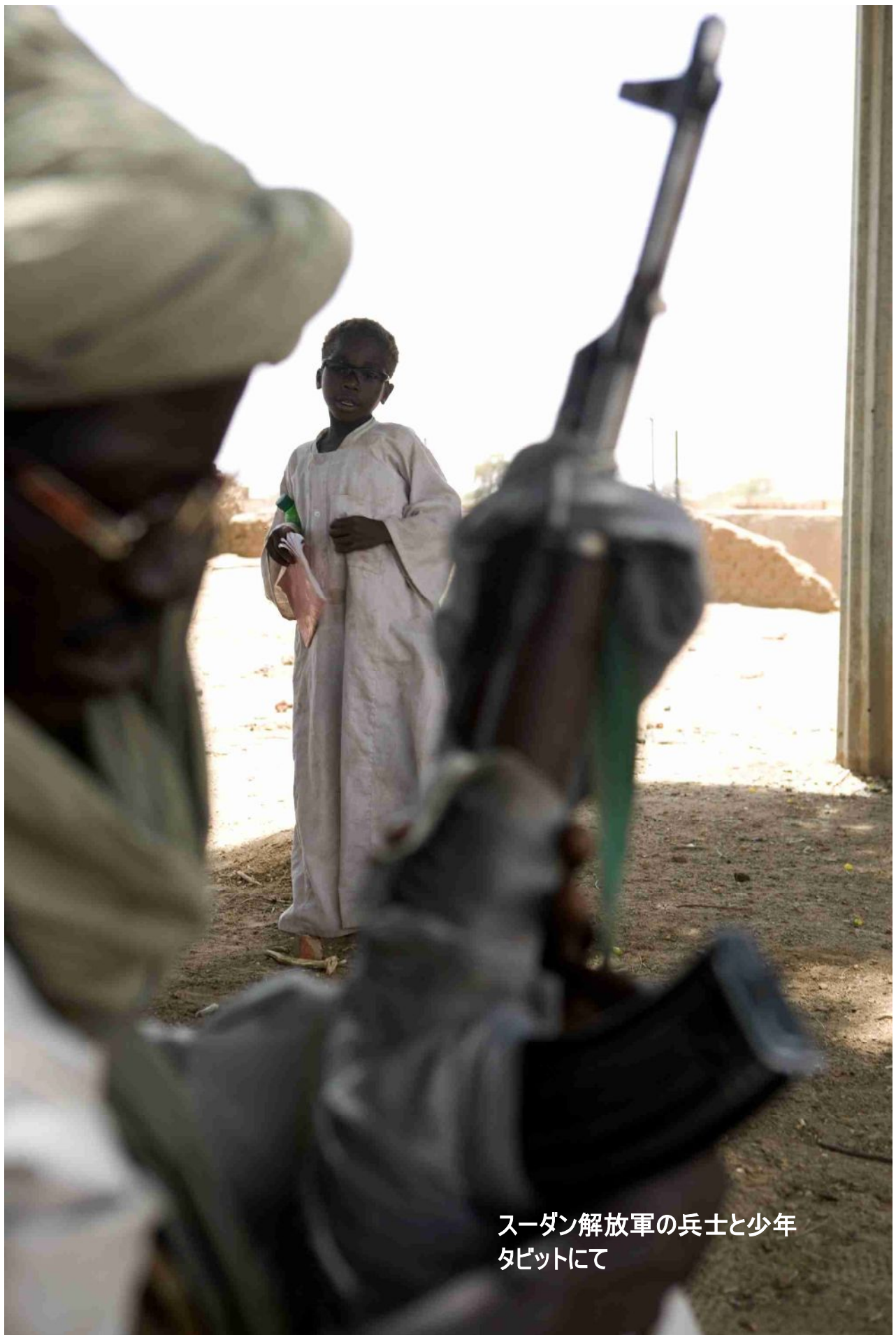
長く続くダルフルの治安の悪さは、住民にとって決定的な問題です。軍の衝突がおさまったかと思えば、それは流動的な支配区域にまたがる政府と反政府勢力の間の散発的な小競り合いへと変化しました。争いのため、社会サービスや市場へのアクセス、牧畜地域、輸送経路が妨害され、経済が更に締め付けられています。反政府勢力内での争いが勃発することもあり、その同盟関係の脆弱さに疑問が投げかけられています。チャドの反政府組織がスーダンの領土内に侵入してくることも更に状況を複雑化させており、彼らの民族同盟への支援が紛争を国際化してしまうことが危惧されています。

村落や避難キャンプへの直接攻撃も未だ起こっています。牛泥棒や、耕作地や伝統的な家畜の移動経路をめぐる競争も間違いなく紛争の一部です。

紛争に巻き込まれることだけが子どもや家族の身体的な安全を脅かすものではありません。軍事グループによる略奪や強盗、不法徴税は、特に作物の収穫期には人々に脅威をもたらします。同時に、キャンプ郊外ではびこる性的暴力は、女性と少女の健康・尊厳・行動を阻害しつづけています。同様に、混雑したキャンプ内で騒乱がおけると支援関係者が入れなくなり、信頼できるサービス提供ができなくなるため、子どもたちの命を危険にさらします。

支援関係者も戦火に巻き込まれるリスクを負っており、実際にしばしば攻撃の対象になっているという報告があります。反政府勢力の支配する領域に侵入することは特にリスクが大きく、NGO のスタッフや国連やアフリカ連合の監視員が、嫌がらせや監禁、虐待、傷害や死に至ることもある直接的な攻撃の被害を受けています。

強盗や略奪は必ずしも物理的な被害者を生み出すわけではありませんが、支援活動を遅らせ、移動を妨害し、最も支援を必要とする人々へ支援を届けるのを阻害します。その結果、一回の事件だけで大きな犠牲を生み出すことにつながるのです。



スーダン解放軍の兵士と少年
タビットにて



人道支援

2003 年と 2004 年初めにかけて次々と明らかになる危機に対して、対応がとてもしれていることが国際社会に広く認識されましたが、その後 2004 年中頃には支援が大きく拡大され、2005 年も更に支援は広がりました。被災者が 2004 年 4 月の 100 万人から 2005 年 11 月の 350 万人まで増加した一方、同期間中に国内または諸外国の支援関係者の数は 1,000 人未満から 13,700 人まで増加しました。支援を受けた人の数も 50 万人以下から 300 万人以上にまで達しました。

支援の成果は現場で明らかに出ています。2005 年 6 月に世界保健機構(WHO)が実施した調査では、粗死亡率(総人口に対する死亡者数の割合)を一日あたり 0.8/10000 でしたが、これは危機時の国際的基準値である一日あたり 1/10000 を下回っており、さらに前年度の 3 分の一の数値となります。これらの指標は、支援を受けた人々の栄養値が急激に向上したことを示す世界食糧計画(WFP)とユニセフのダルフル全域を対象とする食料確保と栄養についての共同調査の仮結果と合致します。調査では 5 才未満児の栄養不良率(Global Acute Malnutrition)の値も 2004 年度の 21.8%から 2005 年度は 11.9%まで低下しました。

栄養補助食支援は、疾病の蔓延を予防し、子どもの健康を守ります。清潔な水とトイレへのアクセスの確保、保健施設の設置、予防接種キャンペーンの実施、石鹼や給水容器等の物資配布、衛生教育プログラムも一緒に実施されます。特に支援が必要なコミュニティには栄養センターが設置され、通常の栄養不良から深刻な状態の子どもまで、適切なケアができるようにしています。全被災地域における基礎教育プログラムの再建は、このような変化の激しい時期にも子どもたちが実のある生活を送れるように支援しています。「子どものスペース」の設置も子どもたちを保護する環境作りに一役買っています。

しかしながら、このようなサービスを受けられるのは人道支援が届く 350 万人だけで、残りの 250 万人の人々は未だ支援の届かない遠隔地域に暮らしており、彼らへの支援をどうしていかかが今後数年間の主要な課題です。

短期的な支援は、状況の安定化に役立つ一方で、内容として十分ではなく、継続するためには甚大な努力と資金が必要です。更に、特に村に帰るための治安確保や、住居、経済、社会の再建のために更なる支援を必要とする避難民などの長期的なニーズとはあまり関連性がありません。

避難キャンプ生活と受け入れる地域

難民と国内避難民のためのキャンプはダルフルの紛争の象徴となり、多くの支援活動の中心となってきました。同地域には現在約 200 のキャンプが存在し、チャドとの国境付近にあるものもあれば、大きな街に群がっている場合もあります。規模も様々で、世界最大の 16 万 3 千人を擁するカルマキャンプから、数百人が一時的に生活している名前のないキャンプまであります。国境を越えてチャドにいる 20 万人の難民及び避難民の数は、約 200 万人にも膨れ上がりました。殆どの人は全てを失い、支援に頼って生活しています。避難キャンプの出現は全体で百万人が暮らす近隣の村や街にも影響を与えています。

子どもたちは安定と恐怖の両極端を揺れ動く感情のムチによる苦痛に耐えていると支援関係者は話します。食料や住居を提供されるという安心の一方、キャンプ内外にうろつく軍の関係者の存在に怯えているのです。単調なキャンプでの生活には退屈さや飽きがつきものですが、数十万人の子ども達は、初等教育や「子どものスペース」によってバランスをとることに成功しています。にわかに仕立てられたテントではなく、より恒常的な建物を要望する声もありますが、元の家に戻りたいという絶え間ない願いによって抑えられている状況です。キャンプ内では比較的安定した生活を送ることができますが、一步離れると虐待、窃盗、レイプや殺人などに遭う可能性に怯えなければなりません。この両極端の感情の影響は子どもたちを予測不可能で危険な最悪の環境へと陥れることになります。

ダルフルで最も古く大きなキャンプはアブシュークといい、3 万人の子どもを含めた 5 万人の避難民を収容しています。キャンプは州都エルファシから約一キロ離れた場所にあります。22 万人が暮らす市場町で、そのうち 3 万人が避難民で、12 万人が子どもです。移住してきたダルフルの人々の殆どはフルやザルガーウといった大きな部族の出身で、2004 年初めに起こった最初の暴力行為から逃げてきた人たちです。子どもを連れ、何週間もかけて 400 キロもの道を歩いてきた人たちもいます。

はじめは、わらで編まれた壁に国連が配布した防水シートをかぶせた住居がキャンプ中に広まっていましたが、アブシュークキャンプにもだいが恒常的な建物が普及してきました。摂氏 50 度の暑さから強烈な砂の渦を巻き起こすサハラ砂漠の風まで変化する厳しい気候条件から身を守るために、多くの人が頑丈な泥レンガ造りの建物へと改良しています。生きていくために必要なものは十分に受け取れています。子どもたちの健康を守ることは変わらぬ最優先事項なのです。

食料と水はもちろん不可欠です。支援機関が穀物、油、その他の必需食料品をキャンプに暮らす各家庭に配布しています。塩素処理された水が、手押しポンプと貯蔵タンクのついた 31 の井戸から手に入ります。衛生を確保するために約 3,300 のトイレも設置されました。子どもが病気になっても、キャンプ内に 6 つの診療所があります。小学校も設置され、日常のストレスや恐怖、倦怠といった感情に対処しそれらを緩和するための施設や、コミュニティセンター、「子どものスペース」も開設されています。アブシュークでは、スーダン教育省が派遣した 235 人の教師により、194 の教室で約 13,000 人の子どもが初等教育を受けています。しかし、避難民に中等教育を行う学校はまだありません。

ダルフルの避難民の不幸な状況に一筋の光を見つけようとするならば、キャンプで提供される社会サービスは多くの人にとって初めてのものだということです。キャンプ内の 80% の人々が清潔な水を使うことができ、65% が衛生的な環境に暮らし、子どもたちはコレラや下痢といった水によって感染する致命的な疾病から守られています。ほとんどのキャンプで保健サービスが提供され、230 の固定又は移動診療所がキャンプに暮らすほぼ全員に保健サービスを届けています。更に、食料や栄養補助食の供給によって、既に述べたとおりキャンプ内の栄養失調の割合が下がりました。避難民のうち 6 歳～13 歳の 34 万人以上の子どもが学校に通い、その半数は女の子です。学校へ通えない子どもたちのために 355 の施設が設けられ、紛争の影響を受けた 166,000 人の子どもたちと 2,000

人の成人を支援しています。



現在緊急支援によって提供されている保健と教育サービスは、ダルフル史上最上のものだと言えますが、人々は帰還するよりも、移住してきた場所へ留まり支援を受け続けているために、全体的としての影響は限られたものであり、長期的な持続性は疑わしく、この事自体がダルフルがこれまで歴史的に放置されてきたことの証明であるといえます。学校に通う子どもたちの数は未だダルフルの学齢期児童の28%にしかならず、教育に関する緊急支援のための資金がいつまで続くか保証はありません。子どもの保健は不安定なままです。疾病の発生は常に脅威であり、診療所も厳戒態勢におかれ続けています。人口が密集しているキャンプでは、コレラが1、2件発症するだけで、何百人を死に至らしめる伝染病の勃発へとつながってしまいます。

さらに、キャンプは生き延びるためには助けになりますが、生活していく上ではとても大変です。必死な毎日の中、避難民は新たな対応策を考え、子どもたちをも巻き込みます。街で単純労働を探していくばくかの収入を得る家庭や、配給された食料の一部を売ったり、子どもに物乞いをさせたりする家庭もあります。近隣の街の農民から借りた土地に僅かな作物を育てる人々もいます。キャンプ内では、男の子はテントを泥のレンガ小屋へと造り変えるためのレンガを作っていますが、それが逆に限られた水の供給を枯渇させてしまうこともあります。

病院から断られた女性が、ひどい栄養失調の子どもを抱えて途方に暮れています。ユニセフはこの家族を栄養補給センターへ連れて行きました



農作業を一休みする 10 歳のハワ
と父親。二人は崩壊した村に戻っ
てきた唯一の人間です

アブシュークは 2 年前には存在しなかったキャンプですが、今はエルファシ郊外に不規則に拡大しつつあります。街の住民はアブシューク付近の住民と同じく、攻撃を恐れて遠くまで出かけることはありません。かつては活発だった市場は崩壊してしまいました。最近の収入は主に支援機関によるものです。しかし、支援機関のサービスは街まで拡大されることは少ないため、人々は水や保健、教育のためにお金を払い、僅かな資源から食料を買わなければいけません。そうすると、エルファシからアブシュークに移動して、特に子どもたちのために無料サービスを受けようとする人々がいるという報告も驚くことではありません。

更に、エルファシに人が殺到しつつけるため、土地とそこに住む人々の微妙なバランスを崩しています。水や木のような生活に不可欠な自然資源が憂慮すべき速さで激減しています。このような現象はダルフル全域そして国境を超えたチャド側の領土で起こっています。キャンプのために掘られた試錐孔はエルファシと同じ地下水から採られており、アブシュークにある 31 の井戸のうち、6 つは既に枯渇してしまっています。支援活動がフルに開始されてから初めてとなる最近の雨季には、地下の貯水がある程度回復したのですが、水の専門家の間では、場当たり的な井戸発掘の影響でこの乾燥地域の地下水面が持続不可能なレベルまで低下してしまうことが懸念されています。

エルファシ周辺に広がる埃まみれの荒地は、かつては高さ 2m のアカシアの木々で一杯でした。それらは、避難民が薪や収入を確保するために集め、土地を一掃してしまったために、今はもう存在しません。木々を集めるのは通常女の子の仕事で、毎日キャンプから遠くまで出かけざるを得ないのですが、そのためにレイプや虐待の危険に晒されています。しかし、この薪探しのための長時間の移動は非常に重要です。薪がなければ家族は食事を作ることができません。支援で提供される穀物中心の食料も、火にかける必要があります。単純で憂慮すべき問題ですが、確実な解決法が見出せていない状況です。そしてこれは、ダルフルの子どもたちが日々直面している無数の危険の象徴であるといえます。

キャンプ外のダルフル農村部

ダルフルの人口 600 万人のうち、約 250 万人が支援地域外にいます。支援地域外に住む人々の状況はほとんど知られていませんが、支援関係者の移動可能範囲が広がりつつある中、状況は変わり始めています。反政府勢力の支配地域に住む人々については、支援関係者はほとんど情報を持っておらず市場や社会サービスから切り離されています。一方、政府支配地域に住む人々は、軍や民兵の恐怖におびえながら生活し、周辺地域から移動することはほとんどありません。ほとんどの人々は、広大で境界の定かでない土地の中で小部落で生活しており、中には季節ごとに家畜を連れて移動することができなくなった遊牧民もいます。これら全ての人々に共通する最大の問題は飢えと渇きです。

食糧難と水不足は、ダルフルの明らかな特徴です。人々は広大なサハラ砂漠の端に住んでおり、主要な都市や近代化された貿易経路からはるか遠く離れ、中央政権からはないがしろにされ、最も基礎的な生活基盤さえありません。自分達だけでダルフルの人々は平和と安定の時代に対応することができます。多くのアフリカのサハラ地域の国と同じように、近年では 1980 年代中頃、ダルフルは飢饉を経験しました。彼らは以来 10 年間、深刻な干ばつと、それに付随して起こる砂漠化に耐えてきたのです。収穫の少ない時期には、家族たちはなんとか対応してきました。大人たちが食べ物を減らすことによって、子どもたちはごくわずかな食べ物をもらうことができました。また、次の収穫までの間の食料不足を埋めるために野生の食べ物を探し回ったり、何人かの大人たちは首都ハルツームや外国へ、家族に生活費を送金するために、仕事を探しに移住したりしました。

それでもなお、気まぐれな天候や人間の凶暴性によって、食料を得ることが徐々に困難になってきました。二つが一緒になると、惨事が起こります。これはタフツ大学ファインスタイン国際飢餓センター（ボストン、米国 2004 年 6 月）から出版された「ダルフルー包囲網の中での生活」の中で詳しく説明されています。そこでは次のように主張しています。「ダルフルの歴史上かつてないほど様々な要因が重なり合って、生活手段と資産の損失を招きました。これらの要因は、計画的な資産剥奪、生産の失敗、市場の失敗、天然資源へのアクセスの失敗、出稼ぎ労働者の制限等があります。これらの状況下で、地域全体で飢えが必然的に現れたのです。

「ダルフルの食料確保と栄養調査」の中間集計では、栄養不良率が下がっていることがわかりました。しかし、キャンプ内の子どもと農村部にいる子どもの間にはかなりの格差が生じています。キャンプにいる子ども達は、収入や食料が増えたからではなく、支援がより確実に受けられるために安定した状況にいたることがわかりました。その上、ダルフルのほとんどの家庭が、昨年よりさらに貧困に陥っています。2004 年には、ダルフルの家庭の 50%が自分達の収入の中から日々の食料費を捻出できていましたが、今年それができているのは 20%の家庭だけです。この結果は、まだ調査されていない農村部に何が起きているのか様々なヒントを与えてくれます。

西ダルフルのナバガイア村の状況は、今も自分達の土地に住みつづける人々が直面している様々な問題を映し出しています。キャンプ生活を余儀なくさせる焼き討ち、略奪と殺人の多くは免れましたが、人道支援の対象とはなっていません。村には小学校が1つ、水源が一つあり、保健施設はありません。男の子は蒔を売ったり、近くの町の

市場で働いたりしてお金を稼いでいます。村人が2005年6月に訪問者に話したところによると、民兵が作物をめちゃくちゃにして、用心棒代を強要し、盗みを続けているそうです。村長によれば、このようなことが一つの理由となって、作物を植えるのをやめたほうが良いとみんなが思いはじめているのだそうです。

彼らは、残されたソルガム(もろこし)、玉ねぎ、オクラや油といった材料から作った食事を、3食から2食に減らして当座をしのぎました。そのうち1日1食になり、子ども達だけでも食べられるように何日も食わずに過ごす大人もいました。食料を切り詰めたことにより、全員、特に子ども達は生き残ることができています。2005年6月にWFP(世界食料計画)のチームがこの土地を調査し、ナバガイアは初めて人道支援を受けることになりました。今、この村は、作物が少ない時期には食料配給を頼りにしています。子ども達にとっても、農業や仕事ができない状態では、短期的には、人道支援は唯一の生存手段であるということは明確です。彼ら、そしてこの地域の多くの家族にとって、いつになったら、自給自足を可能にする経済活動を再構築することができるようになるかはいまだ不透明です。

続く暴力とトラウマ

この報告書で述べたように、ダルフルのほとんどの地域は封鎖されているとみられます。市民は絶えず政府軍と反政府勢力に狙われています。この包囲網の中で、無法地帯がはびこっており、道端での強盗はダルフル市民の大きな問題となっています。約13,700人の国内及び国際的な支援関係者が支援をしています。

心理的・社会的影響は数値では表せられないものの確実に存在しています。支援関係者はキャンプ内である種の集団トラウマを報告しています。家族という保護の体制が回復には不可欠であるにもかかわらず、両親たちは自分達が非力で無力だと感じ、自力ではコントロールできない運命論のような考えが広まっています。子ども達は自分が見た暴力的な場面や、キャンプや集落の外に残っている馬に乗った兵士への恐怖を話しています。農村部では、多くの男性が殺されたり、兵隊として動員されてしまったため、数十万人もの女性がひとりで子どもや残された家族を育てています。このような母親達の日常的ストレスは、子どもの面倒を見ることができなくなるほど深刻になっています。疲労困憊と失望で、自分や子どもたちの将来を絶望視しています。この状況は、武装グループや自警団へ動員される危険のある若者にとっても同じです。入隊することは、時には、安全が戻ってくるまでの不安定さより望ましいとされることもあります。

支援関係者は、特に深刻なトラウマを抱えており、特別なケアを必要としている子どもはほんの少数だと報告しています。家族という保護のしくみは重要です。いくつかの支援では、学校外やコミュニティセンターなどで、レクリエーションや社会活動を通じて、日常の感覚を取り戻せるよう試みています。この試みは、兵士として戦闘に巻き込まれる危険性がある若



チャドのイリディミ避難キャンプで、耐久性の住居を建てるためのれんがを作る子ども

者に対しても非常に有効です。

レイプの危険性は、最も精神的に影響を与え、絶えず起こっており、よく知られているこの紛争の側面のひとつです。レイプは、女性や女の子たちがキャンプや家を離れ、蒔や野草を集めにでかけたときに起こります。多くの被害者はさらなる危害や社会的非難を怖がって話そうとしないために、正確な数を把握することは非常に難しいのですが、被害件数は数千にのぼると推測されています。

国連人権高等弁務官の最近の報告によると、報告されたレイプの 3 分の 1 で、被害者は子どもです。さらに、ユニセフや UNFPA (国連人口基金) の最近の報告では、その数はさらに多い可能性がある指摘されています。レイプの直接的な影響は、被害者にとって生命の危機や恐怖を与えることです。そしてさらに家族やコミュニティそのものに打撃を与え、特有の屈辱感や無力感を与えるあまりにも苦痛な出来事です。長期的な影響としては、肉体的・精神的な傷の治療や、レイプによって産まれた子どもは自分達の子どものとして受け入れることが難しく、どう育てていくという問題があります。

女性のレイプの危険性を減らす対策もいくつかあります。燃料の消費を減らし女性達がキャンプ外へ出る回数を減らしたり、アフリカ連合と連携したパトロールを行っています。アフリカ連合が駐留もしくはパトロールしているところでは、女性や女の子は焚き木集めや他の用事で外出がしやすくなりました。

これらの対策は予防に焦点があてられていますが、被害者支援はごくわずかなものでした。支援機関は、スムーズかつ迅速に医学的治療を行えるよう提唱していますが、政治的な難しさから多くの地域では活動は限られています。学校外やコミュニティセンターを中心に支援を行っているいくつかの支援機関は、子ども達へのレクリエーションや社会活動を通じて、精神的なサポートを提供するよう試みています。レイプされた女性や女の子達を拒絶することをやめるよう家族やコミュニティを支援する活動はまだ多くありません。キャンプでは全般的に、長期的な精神的ニーズよりも、すぐ必要な物理的ニーズに対してより多くの支援が行われています。

市民への攻撃や、多くのレイプが行われているという事実は、両勢力での合意があるにもかかわらず、ダルフルは安全でないことを示しています。和平合意は、第一歩にすぎませんが、和解をさらに進め、両者が共に生活し、資源やサービス、そして共通の未来をわかち合うために、非常に重要なステップとなります。



カス避難キャンプの子ども
センターで遊ぶ子どもたち

おわりに

アブジャでの和平交渉の参加者は、権力や富の分配について話し合いを行う一方で、子どもたちの安定した未来を確保するための最善の方法についても考えています。

しかし、ダルフルの 300 万人の子どもたちは紛争の矢面に立たされ、根本的な解決法がないまま過ぎていく毎日の中で、長期的な見通しは日々暗くなるばかりです。何十万人もの子どもたちが紛争の結果既に亡くなっています。

175 万人以上の子どもたちが避難キャンプかその周辺に暮らしています。そこではかつてないほどの社会サービスを受けられるものの、住民は、精神的に打撃を受け、いつまでも続く恐怖感に苦しみ、未来への希望を失ったまま、困難の中を生きています。

さらに 125 万人の子どもたちは、今はようやく外からのアクセスが可能になりましたが、食料も水も乏しく、社会サービスなどは殆ど存在しない場所に暮らしています。経済は急速に落ち込み、農地は休閑中、家畜も略奪された状況の中、多くの家庭は子どもに食べさせる余裕がありません。飢餓と極度の困窮が、まだ人道支援の届かないこのような人々の前に待ち受けています。

ダルフルの子どもたちの差し迫った生存を確保し、紛争の影響を最小限に食い止めるために、少なくとも 2006 年の間、そしておそらく更にその後 5 年間、国際社会からの支援を増やすことが必要になってきます。

短期的に人々の生存を維持するための活動はもちろん不可欠ですが、数十年にわたるスーダン南部での紛争ではっきりとわかったように、人道支援は決して十分なものではありません。人道支援が、現状維持のための「ケアと維持」活動となってしまうように、解決方法が話し合われる必要があります。

治安のための新たな合意形成や土地の共用、機能する社会サービス網などの真の解決策の代わりに支援が利用される状況が長引けば長引くほど、ダルフルの人々はいつしか無くなる国際支援に依存することになります。

同時に、ダルフルの子どもたちは自分たちに自立したまともな未来があることをほとんど期待できない状況です。キャンプ内外共に、各家庭レベルでの経済的な見通しは不安定です。強力な既得権益を握る勢力は、収入や食料を得たり、交易を行う伝統的仕組みを蝕んでいます。ダルフルの子どもたちの大半は、現在の国際的な支援活動の枠組みの外に生活しており、栄養不良や疾病、暴力や恐怖などの危険に晒されています。

スーダン南部や北部で今子どもたちが得られるのと同じ機会を、ダルフルの子どもたちも得られる権利があります。今回の和平交渉の結果、スーダン南北間で結ばれた包括的和平合意と同様の合意をもたらすことができれば、2006 年はこの地域にここ数年で初めての安定をもたらすことができるかもしれません。そうすればダルフルの子どもたちは、今は胸の中に密かに抱いているだけの希望や夢を実現し始めることができるかもしれないのです。